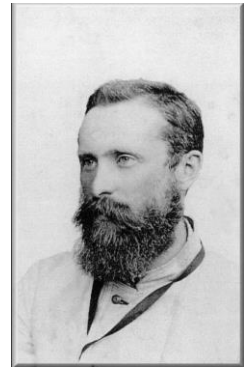


## 4. 交流の歴史から

ポーランドのアイヌ研究者  
ピウスツキの仕事

— 白老における記念碑除幕に寄せて —

井上 絃一



ポーランド共和国文化・国民遺産省はこのほど、ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)のブロンズ胸像を白老のアイヌ民族博物館へ寄贈します。彼の最初の記念碑は1991年11月2日にユジノ・サハリンスクのサハリン州郷土誌博物館に建立されており、白老の記念碑は世界で二番目の壮举です。贈呈・除幕式は、来る10月19日に白老のアイヌ民族博物館で、ポーランドのB.ズドロイェフスキ文化・国民遺産相やC.コザチェフスキ駐日ポーランド大使らが列席して挙行され、ピウスツキ家からも三人の「孫」(ブロニスワフの孫でピウスツキ家嫡嗣の木村和保氏、実弟ユゼフの孫でユゼフ・ピウスツキ博物館長のクシチュフ・ヤラチェフスキ氏、末妹ルドヴィカの孫でブロニスワフの伝記研究にも携わる作家のヴィトルト・コヴァルスキ氏)が出席する予定です。

翌20日には北大の学術交流会館で、市民を対象とする記念セミナーが開催されますので、関心を共有される皆さまは奮ってご参加ください。

ブロニスワフ・ピウスツキは、ロシア帝国に併合されていたリトワニアでポーランド貴族の家系に生まれた卓越する文化人類学者です。サンクト・ペテルブルグ帝大法科一年生だった1887年、ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリン島へ流刑となり、19年をロシア領極東で過ごしました。その間、北東アジア原住民研究に従事し、この分野では先駆的な研究成果を残しましたが、1906年のヨーロッパ帰還後も不遇で、膨大な成果の整理・公刊を果たすことなく、第一次世界大戦下のパリで客死します。年子の実弟ユゼフ(後のポーランド共和国初代元帥、国家首席)が亡国ポーランドを再興する半年前のことでした。

ピウスツキ没後ほぼ1世紀が経過し、特に1970年代以降は、彼の生涯や仕事の掘り起こし作業がポーランド、ロシア、日本などで進められ、ピウスツキは今や北東アジア原住民研究の魁(さきがけ)として、揺るぎない地位を占めています。

彼の仕事では、1912年に刊行された著書『アイヌの言語・フォークロア研究資料』(クラクフ)が名著として名高く、アイヌのほかにもニヴフ(ギリヤーク)、ウ

イルタ(オロッコ)、ウリチ(オルチャ)、ナーナイ(ゴリド)の言語・フォークロア研究にも、当時の最新機器の蠟管蓄音機やカメラを駆使して携わり、先駆的成果を残しています。これら既刊・未刊の研究業績は、1998年から刊行がはじまったA.F.マイエヴィチ編『ブロニスワフ・ピウスツキ著作集』(全5巻、4巻まで既刊)にすべて収録される予定です。

ピウスツキの学術遺産に新たな光が当てられるきっかけは、1979年春の札幌におけるCRAP(ピウスツキ業績復元評価委員会。のちにICRAP)の発足でした。ICRAPは、ポーランドで発見されたピウスツキ採録の録音蠟管を日本へ借り出し、最先端の科学技術を駆使して音声再生作業を進めるとともに、散逸した研究業績を博搜して然るべく評価し、彼の伝記資料も収集しました。

その成果は1985年に札幌で行われた第1回ピウスツキ国際シンポジウムで報告されました。その後1991年には第2回シンポジウムがサハリンのユジノ・サハリンスク、第3回は1999年にポーランドのクラクフ、ザコパネと、いずれもピウスツキ縁(ゆかり)の地で開催されました。2010年には澤田和彦・井上絃一編『ブロニスワフ・ピウスツキ評伝』(全2巻、埼玉大学教養学部刊)が上梓されました。

日本はブロニスワフ・ピウスツキと浅からぬ縁で結ばれています。彼は1902-06年にかけて4度訪日しました。特に1903年の第2回来日は北海道に3ヵ月、1906年の第4回では東京と長崎を中心に7ヵ月半と、かなり長く滞在しました。

北海道では、ポーランド人シェロシェフスキの北海道アイヌ調査に専門家として参加し、函館と白老に各1ヵ月、平取に1週間余り、札幌に数日間滞在しました。とりわけ白老ではアイヌ・コタンに住みつき、コタンの人たちと胸襟を開いて付き合ったことが知られています。

ヨーロッパへ戻る途上の第4回来日では、政治家・文学者・アイヌ研究者・社会主義者・女権活動家・女流音楽家など多士済々の日本人のみならず、亡命ロシア人や中国人革命家とも交際を重ねた事実もわかっています。なかでも二葉亭四迷との厚

い友情は特筆に値します。ピウスツキのアイヌ研究  
処女作「樺太アイヌの状態」は、東京の京華日報  
社が発行する月刊誌(『世界』26、27号、1906)に日  
本語訳で発表されています。

ブロニスワフ・ピウスツキは 1903 年9月、南樺太  
東海岸のアイ・コタンでアイヌ女性チュフサンマと  
結婚し、助造・キヨの二児をもうけました。彼のヨー  
ロッパ帰還後も、妻子は樺太に留まりました。遺児  
は太平洋戦争後に北海道へ移住し、兄は富良野  
町、妹は大樹町で一家を構えました。今は孫や曾  
孫の世代ですが、ブロニスワフの末裔は全員が日  
本人として日本に住んでいます。因みに、長男助  
造の長男である木村和保氏は、当代ピウスツキ家  
の正統な当主ですが、1999 年のポーランド初訪問  
を機に、ユゼフの孫娘一家とは家族ぐるみで往来  
を重ねています。

今般のピウスツキ顕彰事業の発端は、ポーランド  
大使館が着想されたピウスツキ記念碑の寄贈計画  
でした。2010 年8月には当時のヤドヴィガ・ロドヴィ  
ッチ大使の発案で記念碑寄贈と学術集会を推進  
する実行委員会が発足しました。実行委員各位に  
は「縁の下の力持ち」を務めていただきましたが、こ  
の場を借りて厚く御礼申し上げます。顕彰事業の  
実現に至る3年間には、多方面の方々からご支援・  
ご鞭撻をいただきました。とりわけ事業資金の提供  
を賜るポーランドの文化・国民遺産省、ポーランド  
大使館、ポーランド広報文化センター、グローバル  
COE プログラム「境界研究の拠点形成」、そして記  
念セミナーを主催してくださる北海道ポーランド文  
化協会と北大スラブ研究センターには、特段の深  
謝をここに銘記する次第です。

(いのうえ・こういち、2013 年9月 20 日記)

## 記念「国際セミナー」

日時 2013 年 10 月 20 日(日) 9時-17 時

会場 北海道大学学術交流会館2F 講堂(札幌市北区北8西5)

挨拶 ツィリル・コザチェフスキ(駐日ポーランド大使)  
クシシュトフ・ヤラチェフスキ(ユゼフ・ピウスツキ博物館長、ユゼフ・ピウスツキの孫)  
木村和保(ピウスツキの孫)

### 第1部 講演 9:30-13:00 (日本語通訳付き)

- E.パワシュェルトコフスカ ◆ ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本  
(ワルシャワ大学教授)
- W.コヴァルスキ ◆ 地球人の魁 ブロニスワフ・ピウスツキとは何者だったのか  
(文筆家、ピウスツキの妹の孫)
- A.F.マイエヴィチ ◆ なぜだろうか: 白老でブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が除幕されるわけ  
(アダム・ミツキエヴィチ大学教授、コペルニクス大学教授)

### 第2部 合同セミナー 14:00-17:00 (日本語)

- 井上絢一(北海道大学名誉教授) ◆ 「ブロニスワフ・ピウスツキ年譜」より  
朝倉利光(北海道大学名誉教授、前北海学園大学長) ◆ 古蠟管レコード資料からの音声再生  
村崎恭子(元北海道大学教授) ◆ 樺太アイヌ語研究における B.ピウスツキ蠟管再生の功績  
山岸 嵩(前日本工業大学教授、元 NHK チーフディレクター) ◆ よみがえったモノとコト、よみがえらせた物  
と者

主催 北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター  
共催 グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」  
協力 駐日ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター

## ブロニスワフ・ピウスツキの胸像除幕式と記念セミナー



写真1 (左から) 安藤会長、コザチェフスキ大使、小林監査委員、氏間運営委員



写真2 ポーランド政府から白老町「アイヌ民族博物館」に寄贈された胸像。台座にはポーランド語、日本語、アイヌ語、英語で次の銘が刻まれている。

ブロニスワフ・ピウスツキ  
1866-1918  
ポーランド流刑者、卓越せる民族学者  
アイヌと極東先住民研究の開拓者  
1903年8月  
当地白老に滞在、研究に勤しんだ

昨 2013 年 10 月 19-20 日にブロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業(胸像除幕式と記念セミナー)が実施され、北海道ポーランド文化協会には 20 日の記念セミナー主催者の一翼を担っていただき、また多くの会員の方々の御支援を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

白老のアイヌ民族博物館で 19 日に举行されたブロンズ胸像除幕式=写真1, 2=には、寄贈主のポーランド側から B.ズドロエフスキ文化・国家遺産相、C.コザチェフスキ駐日ポーランド大使、J.ロドヴィッチ=チェホフスカ前大使、M.ウーチュコ・ポーランド広報文化センター所長、ピウスツキ家からは3人の孫(木村和保氏、作家の W.コヴァルスキ氏、ユゼフ・ピウスツキ博物館長の K.ヤラチェフスキ氏)が列席されました。20 日の記念セミナー=写真3=では、200 名を超える人々が北大の学術交流会館に参集されました。

ブロニスワフ・ピウスツキは 1903 年夏の第2回来道の際、白老に1ヵ月ほど滞在しアイヌの人たちと胸襟を開いて交流しましたが、地元の白老ではその記憶がまったく伝承されていません。そこで今回の記念碑建立が、ピウスツキと白老の絆の新たな出発点となることが期待されます。

1980 年代前半の日本では「ピウスツキの蠟管」が当時の最先端技術を駆使して「90 年ぶりに再生」され、全国的な話題になりました。この「蠟管ブーム」の最大の功労者は、音声再生を実現した科学技術の粋(これについては朝倉利光氏=写真4=に報告していただきました)もさることながら、むしろ再生過程とその周辺を記録して全国津々浦々の茶の間に届けたテレビ報道だったでしょう。セミナーでは、ブームの火付け役となり、2本の関連番組を製作された山岸嵩氏(元 NHK チーフディレクター)=写真4=に取材の裏話を披瀝してもらい、端なくも、日本におけるピウスツキ研究の生成過程を跡づけていただくことになりました。

「蠟管」プロジェクトの終幕として、1985 年9月には「ピウスツキ古蠟管とアイヌ文化」と銘打つ国際シンポジウムが、今回の記念セミナーと同じ北大学術交流会館に内外の研究者 148 名を結集して開催されました。同シンポジウムは、アイヌ文化を謳った大型国際集会としては世界初の試みでした。ピウスツキにかかわる国際集会はその後も継承され、1991 年の第2回は「ソ連」のユジノ・サハリンスク、1999 年の第3回はポーランドの古都クラクフ、ザコパネと、ピウスツキゆかりの町を巡回しました。爾来 15 年が経過し、近い将来には第4回集会が世界のどこかで催されることが強く囑望されます。今般の事業は市民を対象とする記念セミナーという形式でしたが、そのような国際的ピウスツキ研究の一端を担うものとして位置づけられます。

日本におけるピウスツキ研究の第一世代は軒並みに高齢化して、すでに鬼籍に入られた方も少なくありません。第一世代の掲げた篝火が第二、第三世代によって首尾よく引き継がれるよう願ってやみません。その意味では、今回の事業が若い人々の関心を些かなりとも喚起できたとすれば、まことに喜ばしい限りです。



ポーランドの映像作家ワルデマル・チェホフスキ氏(ロドヴィッチ前大使の夫君)=写真5=は除幕式の前々日に白老に入り、式の前日から記念セミナーの翌々日まで事業の一部始終を映像に収めて帰国されました。記録映像の一部はインターネットで公開されています<sup>1)</sup>。氏はピウスツキ没後百年に向けてその生涯の追跡調査に挑み、その事績を掘り起こして映像化する構想を温めておられます。この記録映画製作のため、同氏は国際交流基金の研究助成に応募されたので、数年後には飛びきり斬新な視聴覚情報によるピウスツキ評伝に接することができそうです。氏の初志貫徹を心から願う次第です。

北海道ポーランド文化協会には記念冊子『ピウスツキの仕事』の編集もしていただき、除幕式と記念セミナーの参加者に配布することができました。同冊子はその後、増補修正版が北大ホームページの HUSCAP にも収録されています。より包括的で、より正確な情報を希望される方は、どうか HUSCAP 版もご参照ください<sup>2)</sup>。

井上 紘一(2014年2月23日、札幌にて)

<sup>1)</sup> チェホフスキ氏の映像は、以下でご覧になれます。

YouTube 《 polski pomnik na Hokkaido 》

WEB 検索:「ピウスツキ」(動画)

<http://www.youtube.com/watch?v=apYUmJI2EfU&feature=youtu.be>

<sup>2)</sup> 『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事: 白老における記念碑の序幕に寄せて』(HUSCAP 版)

WEB 検索:「ピウスツキの仕事」

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/index.php>



写真3 記念セミナー会場風景



写真4 第2部の講師陣(左から)井上紘一、朝倉利光、村崎恭子、山岸嵩の各氏



写真5 銅像建立式典の安全祈願「カムイノミ」取材するチェホフスキ監督(前列右端)



## 日本におけるポーランド政府の ブロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業に参加して

ヴィトルト・コヴァルスキ

2013年10月19日、この日は秋の陽光のもと、穏やかで熟成した薫りに包まれていた。その薫りは、葦の匂いも軽く身にまとい、きらきらと輝く傍らの湖から木造の広い公共施設の方へと流れ込んでいた。この日、日本の北海道・白老の地を支配していたのはまさしくこのようなオーラであった。ここには、今日では絶滅しつつあるアイヌ民族の生活を再現した野外博物館がある。すでに亡くなった数世代にわたるアイヌ民族の魂が、この祝典にふさわしい天候を彼らの神々に請い願ったのだ。

アイヌの名誉ある同胞ブロニスワフ・ピウスツキは、1903年に白老でアイヌ人のもとに逗留した。これを記念して、彼の胸像の除幕式が「ポランド」という遠国の政府と北海道の行政府の代表者を迎えて行われるのだ。

まず大きなチセのひとつで、強度に日本化され

Witold Kowalski (1946-)オックスフォード大学大学院修了、ポーランドの作家、ブロニスワフ・ピウスツキの妹ルドヴィカの孫。ブロニスワフに関しても多く著作がある。昨年10月のピウスツキ像除幕記念セミナーで講演を行った。



た現代アイヌ人である、野外博物館に勤務する老人たちによる祈祷が行われた。アイヌ人たちの間には、新鮮な白樺の皮で編まれた花冠を頭にかぶった「ポランド」国の文化・国家遺産大臣ボグダン・ズドロイエフスキが腰を下ろした。次には招待された来賓たちが色鮮やかなゴザで飾られたピウスツキ像のもとへ赴き、この出来事にふさわしいいくつかの演説のあと(100名を超える来賓がポーランド語を濃密に耳にしたのはよいことだ)、ズドロイエフスキ大臣



写真1 除幕式で木村和保氏(左)と筆者

が駐日ポーランド大使、北海道副知事らの名士たちとともに除幕を行った。それらの名士たちのなかでも、とりわけ注目に値するのは井上絢一教授で、彼は日本人や、サハリンに暮らすロシア人にブロニスワフの功績をたゆまず伝えてきた布教者である。

次に来賓は湖畔に並ぶチセを巡回し、多種多様なアイヌの踊りや儀式のデモンストレーションを見学した。残念ながらことばの壁のため、出演するアーティストたちの技能を評価することは、外国人には最後まで困難であった。踊りのあと、立派な祝宴の時が訪れた。そこでは、日本で生まれたピウスツキの孫・木村和保=写真1=が来賓を出迎えた。

シャンパンがほとぼり、海草類の魅惑的な美しさや、驚くほどツルツルで噛みごたえのある、スライスされた新鮮な(まるで毒入りのような)タコの足を楽しみ、食べかつ賛嘆しながら、何度も杯を合わせて、ポーランド=アイヌ=日本の友情が刻まれた。えり好みしない私の食道に降りかかってきた料理に対する責任感、国際的レベルであると自覚していたので、私は青白い顔をして、褐色の藻や生の海草などをあれこれ味見したのだった。

日本の海底から私の皿へと直接たどり着いたものではない食物に対するノスタルジーを、高級なアルコール飲料で洗い流していたとき、「ポランド」の文化遺産大臣が筆者のもとへ近づいてきた。彼は、ブロニスワフが思春期(1882-85年)に書き残した「日記」のポーランド版完本の初公刊を個人的に援助したいと提案してくれた。大臣は私が編集した「日記」のロシア語版を読み、ポーランド語での出版に一役買いたいというのだ。私は驚いて、飲み込んだばかりの「昆布」を吐き出しそうになった。落ち着



写真2 除幕式の祝宴でズドロイェフスキ大臣(右)と筆者

きを取り戻すと、協定締結の印に、「ポランド」の国家遺産の保護者と、つましい筆者は色あせた残りのシャンパンのグラスを重ねた=写真2=。

ブロンズ像、ポーランド政府による顕彰、「日記」の原語版の出版の約束、まさにこれらこそ、陽光に溢れて香り立つ秋の日がブロニスワフと妻チュフサンマにささげた贈り物である。生者の間にあって二人に寄り添い、彼らとともにこの日を祝福したのは、もっとも強い絆で彼らと結ばれた孫・和保だった。「わしはその場におった。蜂蜜と…」<sup>訳注1</sup>

おっと、まだ終わりではない。翌朝、道都札幌の大学で、ブロニスワフにささげる特別な学術セミナーが開催された。オープニングは駐日ポーランド共和国大使や、ブロニスワフの孫・木村和保と、豪華な顔ぶれであった。続いてセミナーが始まった。最初に井上絢一教授が、セミナーに招待されたが参加できなかったヴロツワフのアントニ・クチンスキ教授からの手紙を代読した。次にワルシャワ大学のエヴァ・パワシュ=ルトコフスカ教授はブロニスワフ・ピウスツキが生きた時代の日本・ポーランド関係の概要を報告した。残念ながら、この講義は日本語で行われ、通訳イヤフォンの不調もあって(…)筆者にはほとんど理解できなかった。

最後に、クチンスキ、井上両教授と同様、ブロニスワフ・ピウスツキ研究に貢献したアルフレト・マイエヴィチ教授は、われらの主人公の栄光にいたる道程、そして彼の残した著述や物質文化資料が現世代の人々へ伝えられ周知されて、ヨーロッパやアジアの諸民族のグローバル文化のなかで卓越した地位を勝ち取るまでの複雑ないきさつについて語った。マイエヴィチ教授は英語で話し、日本製の視聴覚機器は、彼に対しては戦いを挑むことなく従順に従った。(…)

筆者もこれらの学術的脱線の間割ってはいり、ピウスツキ一族の民族帰属、両親がブロニスワフ、ルドヴィカ、アダム、そしてまたピウスツキ家の他の兄弟たちに授けた、才能や天賦の才のみならず、欠点や苦悩をめぐる遺伝的悶着についても考察することを提案したのだった。

そして筆者が自身の高邁な結論へと到達しようとしていた矢先、小さなサイズのひらひらとした白い衣装を身にまとった、エネルギー満タンの生物集団が会場のなかへ走りこんできたのを目の片隅で確認し、地球外生物の襲撃に違いないと判断して(…)話の流れを省略し、急ぎ足で話を終えた。

パニックを起こす必要はまったくなかった。(…)それは札幌こどもミュージカルの若い(幼いといってもいい)アーティストたちだったのである。この作品は体育の授業の前のエネルギーアップのようにも、(関係者の話では)「ピウスツキの蠟管」に記録されたアイヌ語の祈祷のテキストに関



する思想的な「ミュージカルオペラ」のようにもみえた。〈…〉「わしはそこにおった。蜂蜜とワインを飲み、自分の目で眺め、貧弱な耳で聴いたのじゃ…」

おっと、まだ終わりではない。ブロニスワフについての「オペレッタ」にほろ酔い加減になった北海道大学の主催者たちは、以前の取り決めに反し、マイエヴィチ教授や私の講義の完全な英語テキストを、知識を渴望するインターネット利用者に提供することを決定した。北海道大学の演壇上でパニックを起こした筆者の様子とはうらはらに、そこで語られたことは何ひとつ省略されないことが、業(カルマ)によって決定された。ご興味のある読者諸兄は、《北海道大学 HUSCAP》を参照のこと。

<http://hdl.handle.net/2115/53485>

また、白老の銅像の贈り主である駐日ポーランド大使館は、この機に「ポーランドの偉人」10人の肖像画入りの小さな(とはいえ価値のある、唯一の)日本郵便記念切手シリーズも発行した。80円切手が10枚並んだシート上で、ブロニスワフ・ピウスツキの胸像が存在感を示している=写真3=<sup>訳注2</sup>。

そのあと10月25日に東京の首相公邸で外務省主催のレセプションがあって、井上教授のご好意でマイエヴィチ教授と筆者もこの歓待にあずかった。公邸を退出するとき、井上教授は安倍昭恵首相夫人(…)に、マイエヴィチ、コヴァルスキ両名の講義を収録し、タイミングよく北海道大学により発行された記念冊子『ピウスツキの仕事』を手渡した。「宣伝広報活動」の領域では常套の、井上教授の作戦は完璧な名人芸だった。安倍首相ご本人に冊子を手渡しても、首相はすぐに(…)その存在を忘れてしまっただろうが、(…)非凡なアイデアでよく知られる昭恵夫人が何かの拍子に、もし同冊子を手にとったなら…「わしはそこにおった。蜂蜜とワインを飲み、別れ際に首相夫人から彼女の肖像画入りの石鹸



写真3 ブロニスワフ・ピウスツキ像建立記念切手シート

のようなもの(もしかするとチョコレート)もいただいた」今度こそは、終わりがやって来た。

実際は、やって来たのは、終わりではなく続きだった。正確には二日後に、ブロニスワフの唯一の男系の孫であり、ピウスツキ家の男系最後の生き残りの和保(運命は彼に娘のみを授けたから、男系は彼で途絶え

る)が、ブロニスワフの子孫と家族の集まりに筆者を招待してくれたのである。

読者諸兄に知っておいていただきたいのだが、ブロニスワフはチュフサンマ以外の、いかなる女性との間にも子を持たなかったし、彼の孫、ひ孫、玄孫はすべて、現在は日本に住んでいる。東京のレストランでの会食には、別々の家系を代表する十数名の子孫が集まった。北海道からはブロニスワフの娘キヨの孫・須藤由美と高橋睦雄の両家系、横浜からはブロニスワフの息子木村助造の息子和保の家系の人々がやって来た。全員の名をすぐに覚えるのは不可能で、筆者はすっかり途方に暮れた。和保の勇敢な長女加奈子は機転を利かせて、ヨーロッパからやって来て頭がのぼせた筆者のために席次図=写真4=を素描してくれた。(…)状況をよく理解するのはそれほど容易ではなく、推測するのはさらに困難だった。というのも、神ははるか昔にことばの壁をわれわれに与えたからである。そこで助けとなったのは、ビールと酒である。カブトイカとヤリイカを交互にかじり、辛い海草の入った料理を食べながら、お互いを理解しなければならなかった。

筆者は日本で10日間暮らしたあと、日本料理のかかえる問題に意識的になった。糖尿病、がん、活性酸素、福島原子力発電所の最近の事故後に残された放射性同位元素の問題などを知ったので、褐色の海草どころではなかった(名称からしてややこしい。調理後は、この海草はいっそう緑になるのだから)。日本酒は爛でも、冷やでも、何ともいえないほど素晴らしかったが、杯を数杯傾けると、世界はいっそう理解し易くなった。(…)

さらに数杯を重ねるや、畏怖の念を起こさせる睦雄は、1906年に彼の曾祖父ブロニスワフが曾祖母チュフサンマ(と二人の子供)を運命にまかせて、海の彼方へ永久に去った(彼女の業(カルマ)は、彼らにはそういう風にみえた)のは何故か、筆者には本当に分からないのだということを理解してくれた。

さらに数杯おかわりをし、睦雄の姉・由美とは、まるで記憶にないほど前の時代から私たちが互いに知っているかのように、親戚として固い握手を交わした。一方で、私は魅力的な加奈子に、自分には未婚の息子がいて、彼女も未婚であることを執拗に説明していた。もし話の折り合いがつかなら、何もいうことはない…。これでブロニスワフ・ピウスツキにささげた祝典も終わりを迎えた。「わしはその場におった。蜂蜜とワインを飲んだが、あごひげをつたわるばかりで、口には一滴も入らなんだ…」<sup>訳注1</sup>

しかし「ポランド」の国家遺産の現在の相続人と締結した協定はどうなるのだろうか。それは守られ

るだろうか。よく知られているように「神の恩恵はまだら馬で騒ぐ」<sup>訳注3</sup>。一方で *pacta sunt servanta* (合意は拘束する)ともいわれる。〈…〉昔はそうだったが、現在はどうかは、やがてわかるだろう。一年か二年後には、新刊の『プロニスワフ・ピウスツキ日記』について書評が読めることになるかもしれない。〈…〉 (佐光伸一 訳)

訳注1 スラブの昔話の結びの決まり文句。「〈…〉蜂蜜とワインを飲んだが、あごひげをつたわるばかりで、口には一滴も入らなんだ…」と続く。

訳注2 シートにはポーランドの偉人 10 人の切手が並んでいる——ミコワイ・コペルニク(天文学者)、ヴィスワフ

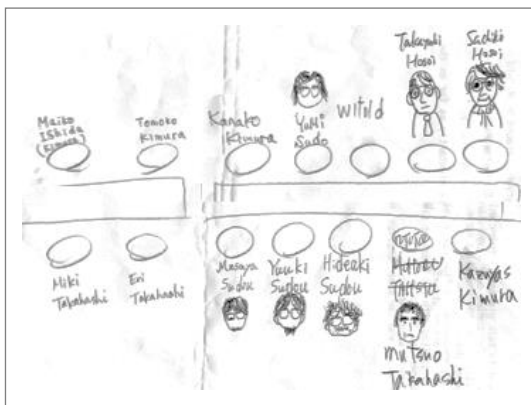
ア・シンボルスカ(詩人)、ヤヌシュ・コルチャック(教育者)、ユゼフ・ピウスツキ(政治家)、アンジェイ・ヴァイダ(映画監督)、レフ・ヴァウエンサ(「連帯」指導者)、ヨハネ・パウロ2世(ローマ教皇)、フリデリック・ショパン(作曲家)、イグナツィ・パデレフスキ(ピアニスト・政治家)、マリア・スクウォドフスカ・キュリー(物理学者)。

訳注3 ポーランドのことわざ。正確には「神の恩恵はまだら馬に乗る」。権力者、金持ちの約束は当てにならないという意味。

※ スペースの都合で、一部割愛(…)しました。

※ ポーランド語原文: Witold Kowalski, “Polska honoruje w Japonii Bronisława Piłsudskiego”

写真4 ピウスツキ家の交歓会(左)と席次図(右)(写真・須藤秀明)



## 日本に親近感を持つポーランド人

松本 照男

### 1. 桜の花咲く国、日本という美称

日本の経済ミッションなどがポーランドにきて、パーティーなどの折り、ポーランド側の挨拶の冒頭で「桜の花咲く日本からお越しの皆様を心より歓迎いたします」という表現にしばしば出会います。単に「from Japan」ではなく「桜の花咲く国」という美称で、ポーランド語では«z kraju kwitnącej wiśni»といいます。他の欧米諸国のどの国が日本をこのような美称で呼んでくれるでしょう？

わたし自身このような表現に何百回となく出会いましたので、あるときそういうポーランド人に「あなたはなぜ日本をそのような美称で呼ぶのですか？」と聞いてみました。「なぜといわれても困りますが、昔から日本のことはそう表現するものだ」と、知らぬまに

まつもと てるお 1942年、埼玉県生まれ。明治大学法学部卒、ポーランド政府奨学生として留学、ワルシャワ大学大学院ジャーナリズム研究所修士課程修了、同政治学研究所博士課程中退。ワルシャワ在住のジャーナリストとして活躍。



頭に入っています」というのが圧倒的多数の答えです。ポーランド社会のなかに、なにやら漠然とした親日感情があるのは肌で感じますが、それがどこからくるのかは、充分判らないままでした。

さあ、それからがわたしの探索の旅の始まりです。キーワードともいえる「桜の花咲く日本」を手がかりに、1970年代に各層のポーランド人に聞きまわり、図書館や古文書館で書物や雑誌、写真などをい



ろいろ調べてみました。

## 2. 親日感情の源泉

ポーランド人が日本に親近感をいだく源泉ともいえる4つの事項について簡単にご説明します。なお、日本とポーランドの正式な国交樹立は1919年3月ですから、それ以来の両国の交流期間は(戦後の国交断絶期間も含めて)わずか95年です。

### 1) 日露戦争の影響

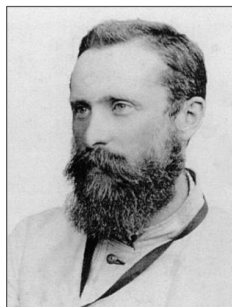
まず日露戦争の影響を「敵の敵は味方」という言葉で説明したいと思います。当時、ポーランドは帝政ロシア(…ばかりではありませんが)の圧政に苦しみ、ポーランド人にとってロシアは、いわば不倶戴天の敵でした。当時は日本にとっても、ロシアは(いまや死語でしょうが)「仮想敵国」でした。つまり、広大なロシアという「共通の敵」をはさんで、ポーランドと日本は隣国同士だったわけです。

そうした状況のなかで、近代ポーランド史で最大の英雄、あるいは統治者と評価されるユゼフ・ピウスツキ(1867-1935)=写真1=という軍人・政治家が、日露戦争開始5ヵ月目の1904年7月、密かに日本を訪れ、日本軍部に、ロシアに対抗する「日ポ軍事同盟」を提案しています。のちにポーランドの独立を達成し元帥・国家元首となったピウスツキの日ポ軍事同盟案は、このときは実現しませんでした。かれは日本側の対応に終生恩義を感じ、後年、日露戦争で軍功のあった日本軍将官51名に高位の軍事勲章を授与しました。その滞在時に通訳を務めた川上俊彦は、初代ポーランド駐在日本公使となりました(在任期間:1921年5月-1923年2月)。

ちなみに、ユゼフの兄プロニスワフ(1866-1918)=写真1=は、ロシア皇帝暗殺の陰謀に加わったとして、弟とともに樺太(サハリン)に15年間の流刑になり、刑期終了後はサハリンや北海道でアイヌをはじめ少数民族の研究を行い、多量の写真や音声資料(ろう管)を残しました。また樺太アイヌの酋長の姪を娶り、その子供たち(子息と娘)は戦後北海道に移住し、そのご家族は現在も日本で暮らしておられます。その子孫の木村さんご一家は、ポーラン



写真1  
ユゼフ・ピウスツキ  
プロニスワフ・ピウスツキ



ドを訪問してピウスツキ家の子孫の方とも交流しております。昨年10月には、1903年夏にプロニスワフがアイヌ調査のため滞在した白老に、ポーランド政府によってかれの顕彰碑が建立されました。

ロシア軍のなかには何十万人ものポーランド人が徴兵されており、日露戦争で日本軍の捕虜となったロシア兵約8万人のうち約20%(1万6千人)はポーランド人といわれます。捕虜たちは四国の松山を中心に日本国内28ヶ所に收容されましたが、日本側の尋問に多くの捕虜が「わたしはポーランド人だ」と名乗り出たとのこと。この事態に驚いた日本側はポーランド人をロシア人と区別して收容し、丁重に扱いました=写真2=。こうした対応には、捕虜の取り扱いを定めたハーグ条約(1899年)の精神にのっとり、国際社会で日本を文明国として認めさせたいという思惑もあったようです。

日本側の思惑はともかく、日本での捕虜生活に多くのポーランド人はよい印象を持ったようです。祖国へ帰還後、多くの人々が書いた「捕虜滞在記」などたくさんの回想録を読みますと、「サムライ魂あふれる日本人」「恩義にあつい日本人」等々、亡国のポーランド人捕虜を丁重に扱った日本人に対する感謝や恩義の記述があふれております。

1982年、現役ジャーナリストだったわたしは、前年にポーランドに戒厳令をしいたヤルゼルスキ將軍の主席政治顧問で、グルニツキという方にインタ



写真2a: ポーランド人捕虜が收容された松山・雲祥寺



写真2b: 松山・御幸町のロシア人墓地  
ポーランド人の墓碑が12基ある

ビューすることができました。雑談になって、同氏は「わたしには夢があります。乃木将軍や東郷元帥の伝記を書きたいのです」と語りました。よく聞いてみると、グルニツキさんの伯父さんが捕虜として日本で過ごし、子供の頃には日露戦争と日本滞在中の話は何十回も聞かされ、日本へ格別の思いをいだいて育ったのだそうです。また、旧体制時代に在野のインテリゲンツィアの代表的存在だったストンマさん(数年前に亡くなりました)も、伯父さんが豊橋で捕虜生活をしており、戦間期にヴィルニユスの週刊誌に連載した「捕虜滞在記」の切抜きを読ませていただきました。

日露戦争に関連して、もうひとつお話しておきたいのは、大国ロシアが極東の小国日本に敗北したことが、ヨーロッパ大陸に心理的にはマグニチュード7か8という激震をもたらしたことです。つまり帝政ロシアの屋台骨に緩みが生じ、ヨーロッパの既成の体制に大変革がおこるかも知れないという予感が沸き上がったのです。ウジュでは帝政ロシアに対する市民の大反乱がおきました。独立を失っていたポーランド社会のなかに、日本という国の光が輝くばかりの明るさで差込み、ポーランド人に希望をあたえ、将来への明るい展望をもたらしたのです。このインパクトはまことに強かったようです。

## 2) 第一次大戦のドイツ人捕虜

つぎは第一次大戦のドイツ兵捕虜の話です。ご承知のとおり日本は戦争末期に参戦し、中国のチンタオ(青島)に駐留するドイツ軍を攻めて4千数百人を捕虜にしました。

かつてポーランドは近隣の三大国、ロシア、ドイツ、オーストリアに三度にわたり国土を分割併合され、1795年には全土を併合されて国の独立を失いました。現在のポズナンも、ドイツ(当時はプロイセンといいました)に併合されました。

ポズナンからドイツ軍に徴兵された多くのポーランド人の一人、クレメンス・ヘルフネロフスキ(1892-1971)さんは、チンタオでドイツ兵として日本軍の捕虜になりました。捕虜たちは四国の松山や丸亀、のちには坂東に収容されましたが、当時、日本は文明国と評価されたいという願望からでしょうか、捕虜の取り扱いが寛大だったようです。捕虜たちは無聊をなぐさめるためスポーツや音楽にいそしみました。日本人はかれらの器械体操の演技に神業をみて、器械体操のグループに日本人への指導を乞い、たちまち優秀な日本人体操選手が何人も育ちました。ついには3ヵ月にわたる模範演技の日本全土巡回公演が組織されました。

この器械体操グループのチーフがポズナン出身のクレメンスさんで、日本の器械体操の生みの親はポーランド人だったといってもよいでしょう。1918年に独立を回復したあと、クレメンスさんは体操選手、のちにはコーチや国際審判として活躍しました。同氏にとって日本は終生忘れられない希望の地だったようです。東京オリンピックのときには審判の一人として来日したそうです。

ちなみに、最近の日本では年末の恒例行事となったベートーベンの第九を、日本ではじめて演奏したのは、坂東収容所のドイツ将兵捕虜でした。

## 3) ロシア革命とポーランド蜂起軍

1917年のロシア革命後、ロシアには内戦の嵐が吹き荒れ、各国列強のシベリア介入があったことは、歴史の授業でよくご存じだと思います。日本軍もその列強のひとつでした。当時シベリア在住のポーランド人が蜂起軍を組織して赤軍(ロシア軍)と戦いましたが、戦闘に破れ、約8千人の兵士が赤軍に降伏します。内戦の最中ですから、赤軍も捕虜の処遇にこまり、最終的には日本軍が赤軍と交渉して、数千人のポーランド兵を軍用列車で大連まで輸送し、そのあと船で祖国に送り返しました。こうして日本軍の保護のもとに祖国に帰還したポーランド兵が、123年ぶりに独立を回復したポーランドの軍隊の中核となるのです。

このとき日本軍の援助で祖国へ帰った兵士の一人に、第二次大戦が始まったとき首都ワルシャワ防衛軍の司令官を務めたチューマ将軍がおります。かれは戦間期には、つぎにお話する、同じくシベリアから帰還した孤児たちや、駐泊日本武官とも、とても親しいお付き合いをしていたそうです。

## 4) 日赤によるポーランド孤児救済

日赤によるシベリアからのポーランド孤児の救済は、100年近い日ポ交流史のなかでも最もインパクト



写真3a ポーランド孤児(日本赤十字社提供)





写真3b 神戸港にてポーランド孤児の帰国乗船  
(日本赤十字社提供)

トの強い出来事のひとつで、ポーランド社会にたいへん強い印象をあたえ、ポーランドにおける親日感情の最大の源泉といえるかもしれません。

1920(大正7)年と22(同9)年に、日本赤十字社が国際難民救済事業の第一号として、1歳から16歳のポーランド孤児765名を、シベリアから敦賀経由、東京、大阪を経て、123年ぶりに独立を回復したポーランドへ送り返したのです=写真3=。孤児たちを日本船で祖国へ送り返すまでの詳しい事情は、それだけでゆうに一冊の書物になりますので、別の機会に譲りたいと思います。

救済事業の背景には、1920年にシベリア出兵した日本軍がウラジオストックを中心に22年10月まで駐留しており、軍用船の利用が可能だったこと、またポーランド人の救済委員会会長の日本外務省や日赤に対する救助請願に応じて、日本の善意を国際的にアピールしたい状況にあったこと、そして純粋に慈悲の念から積極的に援助に応じる気持ちもあったと思われる。

独立を回復したばかりで、荒廃した国土復興の意気に燃えるポーランドの社会状況のなかで、帝政ロシアに反抗して流刑になったポーランド人の子孫の子供たちが日本の援助で母国に戻ってきたことに、興奮しないポーランド人はいなかったでしょう。国の将来を担う子供たちは国の宝、という気分が国中を支配したのも当然といえましょう。

当時の新聞雑誌類を図書館や古文書館、知人の蔵書などで数多く読みましたが、「義侠心あふれる日本人」「サムライ魂の日本民族」「子供を国の宝として育てる日本人」「桜の花咲く国からの帰国者たち」等々、日本への賛美や感謝の文字があふれています。

ポーランドの人々は1904-05年の日露戦争のあと1920年代中頃までに、「桜の花咲く国」日本への

熱い思いを胸の底に深く植えつけたのです。日本の援助で母国へ帰還した孤児たちは成人しても、戦間期はもとより、第二次大戦から戦後の共産主義時代になっても、恩義あふれる日本について、家族や友人知人に語り続けました。1922年に1歳だった人は、いま生きていれば92歳です。当時10歳以上で日本の記憶を強く持つ人々はもうほとんどが亡くなりましたが、残された子供や孫たちは、父母や祖父母から日本滞在の話を目を輝かせて聞いたと、たくさん証言しております。

その由来を知らないままに「桜の花咲く日本」と表現するポーランド人の心の底には、代々受け継がれてきた、往事の日本への感謝や賛美の念がDNA(遺伝子)のなかに刷り込まれていて、日本人をみるとその遺伝子が騒ぐのかもしれない。

こうしたポーランド人の親日感情は、たぶんに「片思い」的などころもあるようです。一方的にポーランド側から惚れ込まれた日本側には、最近でこそ「シヨパンの国」というイメージはあるものの、一般には、幅広い親が感情があるとは思えません。

とはいえ、「森へ行きましょう、娘さん」をポーランドで最もポピュラーな民謡とは知らずに歌ったり、「向こうの森で鳴いてるカッコウ…」の歌を知っていたり、シヨパンの一節「雨だれ」を学校で習ったり、1800年代に帝政ロシアに反抗して蜂起したときの流行歌「ワルシャヴィアンカ」を一70年安保の頃一学生が歌ったりと、普段あまり意識しないのに、ポーランドのものが日本社会に結構浸透しているのも確かです。

ともあれ、ポーランドのように、いたく日本びいきの国があることも知っていただきたいと思います。

#### 写真出典

写真1左(Jozef Pilsduski. 1930):ウィキペディア日本語版;同右(1903年函館、井田写真館にて):ピウスツキの仕事—白老における記念碑の除幕に寄せて、編集責任者 井上紘一、北海道ポーランド文化協会・北海道大学スラブ研究センター、2013.10.

写真2(稲葉千晴撮影):日本におけるポーランド人墓碑の探索、エヴァ・パワシュ=ルトコフスカ、稲葉千晴編集、ポーランド文化・民族遺産省文化遺産局、ワルシャワ、2010.



はじめての東京例会 大成功!

## 樺太時代に生きたポーランド人

～彼らはどこから来て、いかに生き、どこへ帰ったのか～



尾形 芳秀

日本とポーランドの間には過去数々の交流の歴史があり、それが今日まで受け継がれ発展していることはよく知られている。そこに共通するのは、人間としての心の絆であろう。しかし、その経緯には、何か欠落があるようにも感じられる。私は、それは樺太時代に日本人と共生したポーランド人のことではないかと思う。単にポーランド人のことだけではなく、日本史のなかで、樺太時代のことは欠落部分だと思われる。

樺太時代のポーランド人のことが知られていないのは、それ以前、この島は帝政ロシア領で、そこに残留していた人々は日本の敵国ロシア人と看做されていたことや、この島はシベリアに次ぐ流刑の島だったことにも起因している。この島にいたポーランド人は、多くが政治犯だった流刑囚だけではなく、ロシア軍の傭兵や各ポスト(監視所)の監視人もおり、これらの人々は母国が分割統治されていた時代に、生きるための止むを得ない選択肢だった。

この報告は、日露戦争後に日本領樺太に残留を希望したポーランドの人々と、ロシア革命後に北サハリンから亡命した人々が、異国の地で如何に生きたかを調べたものである。樺太史のなかで、これまでこのテーマで発表されたものは、断片的なものだけで、全体像は見られない。近年発行された『日本・ポーランド関係史』(エヴァ・パワシュルトコフスカ、アンジェイ・T・ロメル共著、彩流社、2009)という300 ページ超の大著にも、樺太時代のポーランド人についての記述はたった一行半しかない。日本にもポーランドにも資料がないためだろう。



写真1 リュボウエツキ家の結婚式に集まった樺太のポーランド人たち、豊原の天守公会堂、1925年頃

**おがた よしひで** 1937年、樺太・豊原市生まれ。豊原にはロシア風の丸太小屋が点在し、ポーランド人家族も住んでいた。戦後まで豊原で過ごし、ポーランド人と同じ地区に住み、遊び、同じ学校で学んだ。最近では郷土史家として樺太に関心をもち、樺太豊原会機関誌『鈴谷』(すずや)の編集に携わってきた。

この調査は、文字通りゼロからのスタートであった。断片的な資料や手記から調べ始め、当時の彼らを知る人々に聞き取り調査を行い、彼らの消息を探し、彼らに対してオーラル・ヒストリーを試みて、漸く発表することが可能となった。全体像が判明してからもう10年以上も経過したが、この間も検証を続け、発表の機会をうかがっていた。彼らがポーランドだけでなくヨーロッパ各地で立派に社会に貢献していたこともあり、発表を控えていたのである。

彼らから提供いただいた貴重な写真の一枚一枚=写真1, 2, 3=から、彼らの思いを感じとっていただきたい。第二次世界大戦後の混乱のなかでこれだけの写真を持ち帰ったのは、稀有なことといえる。彼らと共通の思いは、彼らもまた祖父母の足跡を辿っているということだ。ともに樺太時代の戦前・戦後を体験した者として、彼らの生きざまには教えられるところが多かった。今こそその歴史の空白を埋めたいと思う。

### 1. サハリン島時代から樺太時代へ

この島は、1875年までは北方少数民族や樺太アイヌが自然豊かに暮らす島で、同時に日ロ混住の地でもあった。それが1875年の樺太・千島交換条約によりロシア領となってからは、シベリアに次ぐ流刑地となり、帝政ロシアが統治する多くの国々の人々が流刑になってきた。多くは独立のために蜂起した人々や、それに影響を与えた人々だった。この島に来たのは、シベリアよりは罪状が軽微で、主に島の開発を目的とした流刑囚だった。

### 2. ポーランド人流刑囚の動向

1875年以降、サハリン島南部でも流刑の受け入れ準備が進められ、1880年頃からコルサコフ監獄

への収監が始まった。この監獄にはロシア人のほか、ポーランドなどロシアに統治されていた国々の人々も送られてきた。悪名高いコルサコフ監獄では、劣悪な環境のなかで囚人たちが強制労働に従事させられ、体力の劣る者に鞭打ちなどの体罰が続けられていた。

この状況を冷静に見て、同胞を何とかこの境遇から救出しようと、原始の森の開拓に志願する計画を実行したのが、ワルシャワ出身の元ポーランド軍騎兵フ란ツ・チェハンスキ (Franz Ciechański) である。彼の行動のおかげでサハリン時代や樺太時代に同胞は生き延びることができた。彼は、監獄に収容されている同胞のなかから、開拓に耐えられそうな者や特技のある者を 15 名ほど選抜し監獄を離れる。彼の功績は、不毛の地ノヴォ・アレクサンドロフスクにポーランド人の集落「ワルシャワ村」を造り、小さなカトリック教会を建てたことである。彼は本国から妻を呼び寄せ、たくさん子供を育て、同胞に娘たちを嫁がせた。

### 3. 予期せぬ日露戦争

1905 年、この地にも日露戦争が及び、島の流刑囚に大きなインパクトを与えた。当時この島では刑期を終えても解放されることはなかったが、日本軍の侵攻により、この島の流刑制度は一举に解体され、流刑囚だった人々は解放された。とはいえ、大半は沿海州のデカストリへ強制送還されるはずだった。

日露の戦後協定ではこの島の人々は希望すれば残留も可能とされたが、実状は、コルサコフ以北の集落は焼き払われており、残留するにも家もなく食料も皆無の状態だった。この最悪の状態で、多くのポーランド人にも強制送還の恐れがあったが、彼らはチェハンスキの機転で今まで通りの生活が約束されたのである。彼は同胞に対し、この戦争ではロシアの傭兵とならず、日露どちらにも加担しないよう、適切に指示したことにより、同胞を二度も守ったのである。彼らはロシア軍の降伏後、日本軍に物資の輸送等で協力し、それが日本軍から評価されたのである。

大半のロシア人の強制送還が終わったところ、チェハンスキは後継のリーダーにユゼフ・ジェヴスカ (Józef Rzewuski) を指名する。この男はミンスク郊外のシュラフタの出身で、コルサコフに流刑になると、すぐにチェハンスキのいるノヴォ・アレクサンドロフスクに単身で入植し、丸太小屋を自力で造り始め、何年もかけて大きな家にした。日露戦争の前に結婚し、ウラジミロフカ(後の豊原)に移住し、日露戦争の南部戦線の見撃者となった。日本領となっ

たところ、彼は樺太庁の先遣隊の住まいの向かいに住んでいた。間もなくこの地の南側に樺太庁の新首都が建設される。

1907 年、樺太庁発足のとき樺太の残留ロシア人を調査した記録によれば、強制送還後の残留者は 91 名、うちポーランド人は 32 名、ロシア人は 37 名、他の 22 名は 7 カ国に及んでいた。正式な残留者はポーランド人だけで、他は強制送還時に山野に隠れて出頭しなかった人々とみられる。

ジェヴスカは教会をノヴォ・アレクサンドロフスク(後の小沼)から首都となった豊原に移転新築した。この教会(天守公会堂)は、樺太時代のポーランド人たちの拠り所となり、子供たちの母国語教育の場として利用され、何度か建て替えて大きな教会になった。彼はこの教会の後援会長的存在で、大家族でありながら私財を投げ打って拡充に尽力した。彼は、樺太の学校で外国人の受け入れが可能となったとき、率先してポーランド人の子供たちを学ばせた先駆者でもあった。また、後から入植してきた日本人に北方圏の牧場経営の手法や屠殺の技術を伝授した。



写真 2 豊原高等女学校に学んだポーランド人フランジュカ・ジェヴスカ(愛称フラーニャ：左端) 1930 年

### 4. 「樺太波蘭人会」の設立

1905 年当時、彼らはポーランド人と正しく認識されていたが、1930 年頃には、樺太在住の残留人は全てロシア人とか白系ロシア人とか呼ばれていた。これは、ロシア(ソ連)と国境を接する島であったことから、ロシアのスパイが何度も南へ潜入し、国境を挟んで小競り合いが続いていたため、主にロシアからのスパイを警戒した官憲が、島民に警戒させるためにとった措置であり、在樺のポーランド人にとっては苦悩の日々となった。彼らの子供たちは日本の学校で学んでいるのに、このような差別を受けるのは決して容認できないことだった。危害が加えられることはなかったが、「ロシア人」と呼ばれるのは耐えられないことだった。

特に一度に 38 名ものソ連のスパイが日本の官憲に逮捕された事件以降、スパイの潜入先は残留ロシア人宅と注意喚起がなされ、在樺の外国人は不自由な生活を余儀なくされた。そこでポーランド人たちはロシア人との差別化を図るため「樺太波

蘭人会」を作ることにした。1937年、在樺のポーランド人たちは二代目リーダーのジェヴスキ宅に集まり協議し、投票の結果、白浦に住む亡命ポーランド人アダム・ムロチコフスキ (Adam Mroczkowski) を会長に選出し、警察署に会の設立届けを提出する。これまでリーダーは任意に継承されてきたが、このとき初めて選挙で選出された。彼は亡命後から同胞や地元民の信頼の厚い人物だった。このようなコミュニティを作ったのはポーランド人がはじめてだったので、この会の発足は日本の官憲を刺激した。

1941年末、太平洋戦争が勃発し、官憲の警戒はさらに厳しくなった。日露戦争では何かと貢献したにもかかわらず、いつの間にか「ロシア人」と呼ばれることは、彼らにとって予想外のことだった。この時期、どこで戦争の気配を察知したのか、密かに樺太を離れるロシア人がいた。日本の治安当局は、厳しい監視とは裏腹に、情報収集は未熟だった。官憲は、樺太のロシア系外国人の全てを「米国の攻撃から守るため」と称して、豊原市の南東部にある上喜美内地区に秘密裡に隔離する。当時ほとんどの島民はこの事実を知らなかった。ソ連軍は侵攻すると、逸早くこの地区に入り隔離された人々を解放した。

## 5. 二度目の解放

ポーランド人たちは僅か40年間の樺太時代に、日本とソ連に二度も解放されるというめまぐるしい体験をすることになった。1945年、ソ連軍が島の南部を制圧すると、日本軍や官憲を取り調べる際の通訳として、残留ポーランド人を徴用する。彼らの多くはポーランド語よりもロシア語をよく話し、しかも日本の教育を受けていて日本語も正確だった。残留ロシ



写真3 豊原旧市街のジェヴスキ家の結婚式 (前列左端) 二代目リーダー・ユゼフ・ジェヴスキ (新郎ウィクトルの父)、(後列左端) 三代目リーダー・アダム・ムロチコフスキ

ア人や朝鮮人は、日本語は片言程度だった。

彼らは3年ほどソ連軍や民生局に徴用された。この間、日本人の軍属や治安当局の尋問に通訳として立ち会いながらも、いつ日本人と同じ運命を辿るか、不安な日々だったという。彼らは長い年月ロシアに統治されていた経験から、ロシア人の行動を決して信用していなかった。案の定、通訳の仕事が一段落すると、ムロチコフスキは、亡命ポーランド人であり、またポーランド人会の会長だったことから、ソ連官憲の取り調べを受けるが、彼の知恵でなんとか解放される。

1948年、この地に流刑になって半世紀振りに、ポーランド人たちはようやく帰国の途についた。しかし、母国に帰国したのは全員ではなかった。ロシア人や日本人と結婚していたり、家族の無事帰国を願ったりしてソ連に残留する者もいた。ドイツ人や亡命ロシア人と結婚した者は、ヨーロッパや米国へ旅立った。

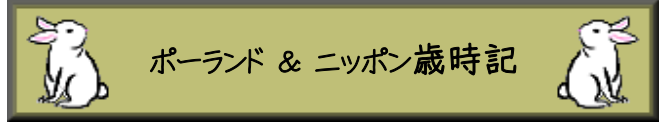
はじめての東京例会 (第69回) 「樺太時代に生きたポーランド人」は2014年6月28日 (土) 午後2時から駐日ポーランド共和国大使館で開催され、55名が参加する盛況でした。会場をご提供くださったポーランド広報文化センターはじめ、多くの方々のご支援、ご協力に心から感謝します。



写真 (左) 講演後に 前列中央: 尾形芳秀さん、ヴァチンスキさん (尾形孝二氏提供) (右) 講演風景 (西島國昭氏提供)



(2)



(3)

復活祭は冬から春への過渡期でもあります。もし永遠の命という視点があれば、無季語の俳句を詠んでもいい理由になるのでしょうか？

po zmartwychstaniu  
ściele się całun biały  
śnieg na ulicy

czy wyda owoc?  
obsypane kwiatami  
drzewo moreli

ボズナン市、津田モニカ

復活の街に白雪聖骸布  
実を結べ花散りばめし杏子の樹

我が家の近くに教会があり、その裏には公園があります。よくそこで散歩をします。今回、突然もう春だということに驚かされました。つい最近まで、季節が変わる気配などまったくなかったのです。

ポーランド大地ほろびず親仔馬  
陽炎や万羽はばたくヴィスワ河  
旧市街木玉子絵卵イースター  
春の沼鳥獣乱舞夜光杯  
岩見沢市、霜田千代麿

ポーランドの夏休みは、野菜や果物の収穫期、そしてそれらを冬に備えて瓶詰めにする時期でもある。特に八月は、胡瓜の採れる頃で、「胡瓜シーズン」と呼ばれる。ポーランドの美味になっている「腐った胡瓜」は、胡瓜の漬物で、ニンニクと西洋ワサビ、イノンドというハーブで風味をつける。秋と冬の長い夜には、夏の欠片の詰まった瓶を開けるのが、ちょっとした楽しみとなる。

słodkie maliny  
smak wakacji zamknięty  
w małym słoiczku

przyjęcie ślubne  
wzruszone niebo płacze  
wieczornym deszczem

wieczór po deszczu  
cichą przestrzeń spowija  
słodycz petunia

ラズベリー小瓶の中の夏休み  
婚宴に天も涙す夕立かな  
ペチュニアの静かな甘み雨の後  
ボズナン市、津田モニカ

### ミントの香る家…

私たちの今年の夏は、ハーブの季節となりました。鉢植えのミントがその香りで心を和ませてくれます。周囲には、家庭菜園でハーブを栽培している人がいれば、ベランダや窓際で育てている人もいます。我が家では、例年のごとく、花も植えています。ハーブも美しさも奥が深いです。

沢蟹も独活ももってけ浜漁師  
太陽へ向くヒマワリの偽善かな  
風わたるゴッホをおもふ麦の秋  
岩見沢市、霜田千代麿

〈ポーランドの都市の伝説～トルン 2〉

いかだし  
**筏師と蛙たち**

昔々、洪水が起こってトルンの町に蛙の大群が流れ着きました。町のいたるところ、蛙であふれました。街の通りにも、民家の中にも、旅籠(はたご)の中にも、市庁舎の大広間の中にも蛙がいました。町の住民、商店主たちは憤懣(ふんまん)やるかたなしです。町の中は住みにくくなりました。市民は、市長が責任を取るべきだ、と考えました。苛立(いらだ)った市長は、忌まわしい蛙たちを始末するように、全市民に命じました。しかし、残念ながら、蛙は人々の手に負えませんでした。

そこで、市長は布告を出しました。

「我々の町を蛙から解放してくれる者は、英雄となる。その者に余は余の娘を妻として与え、かつ莫大な財産を与える」

多くの志願者が現れましたが、蛙を始末することができた者は一人もいませんでした。

ある日、町に筏師のマテウシュが筏に乗ってやって来ました。たいへん貧しい男でしたが、かねてから市長の娘のマルタにぞっこん惚れていました。

「わたしが町を蛙から解放してみせます！」と彼は約束しました。

みんなは筏師を馬鹿にして笑いました。彼を信用していなかったのです。筏師は旧市街の広場に出て、バイオリンを弾きはじめました。素晴らしい演奏

でした。

「この若者のバイオリン演奏はじつに見事なものだ！ 聴いていて何と楽しいことか！」人々は感嘆の声を上げました。

蛙たちもマテウシュの奏でるメロディーにたちまち魅せられてしまいました。蛙たちは彼の周りに集まってきました。若者は最後の一匹の蛙が、ゲロゲロ鳴いている仲間の群れに加わるまでバイオリンを弾きつづけました。そこで筏師は、ゆっくりとヘウム門の方向へ動きはじめ、門を抜けて町の外にある沼まで来て、やっと止まりました。そこは蛙たちの理想郷でした。音楽は鳴り止みましたが、蛙たちはその沼にとどまりました。

「あの筏師は素晴らしいことをやってのけたものだ！ 良い考えを思いついたものだなあ。何よりもありがたいのは、われわれが忌まわしい蛙どもから解放されたことだ」市民は称賛を惜しみませんでした。

「余は喜んで約束を一刻も早く果たそう。筏師に褒美をつかわし、娘のマルタを与えよう」と市長は言いました。

婚礼の祝いは七日七夜続きました。マルタとマテウシュは末永く幸せに暮らしました。二人のあいだに七人の子供ができました。

\* \* \*

トルンはヴィスワ川によるグダンスクまでの丸太浮送ルートの特産で、筏師たちの休憩場所として知られました。旧市街の聖ヤン(ヨハネ)大聖堂の時計は中心街の方角ではなくヴィスワ川の方角を向いて、筏師たちに時を知らせました。町を蛙の災害から救った筏師の名は、イヴォとも言われます。

栗原 成郎



Pomnik flisaka  
 トルンの旧市街にある  
 筏師の像



Legendy Toruńskie,  
 Toruń, 2007 より